

平成29年度第1回瀬戸市総合教育会議 議事録

▽日時

平成30年3月28日（水）午前10時30分から午前11時40分まで

▽場所

瀬戸市役所4階 庁議室

▽出席者（順不同、敬称略）

【瀬戸市総合教育会議構成員】

瀬戸市長 伊藤保徳

教育委員会教育長 深見和博

教育長職務代理人 佐野嘉崇

教育委員会委員 加藤高明、加藤智子、林みゆき、寺田康孝、二宮あづさ

【事務局等】

副市長 青山一郎

経営戦略部 部長 高田佳伸

経営戦略室 室長 篠田康生、室長補佐 大岩三明、専門員 杉江圭司

地域活動支援室 室長 藤井邦彦

教育部 部長 涌井康宣

学校教育課 課長 松崎太郎、主幹 早川寿、企画係長 清水隆之、主事 水野華

▽協議及び調整事項

「地域全体で子どもを育み社会が共に成長するまちづくり」について

▽協議内容

議事に先立ち、伊藤保徳市長から開会のあいさつがなされ、組織改編を契機とした第6次総合計画の推進について説明がなされた。

その後、予定した協議及び調整事項について意見交換を行った。主な意見は、以下のとおり。

委員

私からは光陵中学校で行われている地域未来塾についてお話ししたい。地域未来塾と聞くと、伝統工芸を意識した講義主体のものかと思っていたが、実際は夏休み等を利用して図書室で放課後学習を行うという取組である。光陵中学校区の地域柄、塾に行けなかったり、家庭的に恵まれない生徒がいる中で、その子供たちの目を勉強へ向ける取組として、教員OBや学生ボランティアの協力の下、行われているものである。教員OBがいることで図書室での秩序が保たれ、これから教員を目指す学生ボランティアが中学生に勉強を教え寄り添う経験となり、中学生にとっては教室ではない場所で、教員ではない人に勉強を教えて

もらうという経験となり、生徒たちから「次の未来塾はいつ？」といった声もあるようだ。まさに地域と共に、三位一体となって取り組んでいる非常にいい例である。今、光陵中学校で地域未来塾へ行っている生徒が、光陵学区の小学校6年生にも地域未来塾での取組を伝えることで、小中一貫教育の足掛かりにもなるのではと思う。今後は、他学区でもそれぞれ地域に合った特色を活かした取組があるといいと思う。

委員

核家族化が進み、夫婦共稼ぎの世帯が増加しており、子どもと向き合う時間や心のゆとりが持てない保護者が増えている。地域でもお互いに支え合い、助け合う意識も弱っている。その中で、若い世代が子育てを安心してできる環境について考えた。私が住んでいる古瀬戸地区では、一時期古瀬戸小学校の草がいっぱいになった時、校長先生と地域で話し合い、年に2～3回草取りをしようという事に決まった。草取りをしている間に、親子の触れ合い、家族と地域とのかかわりが生まれ、みんなの力で校庭が綺麗になった達成感も味わえた。また、古瀬戸公民館の活動で、小学校の体育館を使用し、40年間活動している鳴子チームの活動も紹介したい。市内、市外から集まった4～78歳までの親子、三世代家族の50名が集まっており、3歳のころは床で転げまわって遊んでいた子、複雑な家庭の事情の子など様々いたが、周りの大人の助言もあり立派に成長した様子を見た。どちらの活動も子育て支援を目的としたわけではないが、家庭教育の役割や、異年齢間の交流による協働の力を体験できた。こういった場所に親子で参加できる機会がもっと多くなるとよいと思っている。

委員

各地域で活動している学校ボランティアは、PTAや自治会、公民館がそれぞれ協力しながら活動している。古瀬戸連区には「メダカが住める川づくり」を通して郷土愛を育んだり、本山連区では「本山工房」で大人が作った焼物をせともの祭で販売して、本山中学校の国際交流の費用に充てている。東明連区では、公民館主催の「歩け歩け」や、アマゴ掘り、ねむの森、長谷観音の仁王像など、もともと地元にある資源を活用して、郷土に触れてもらう活動をしている。その中で子どもが大人と触れ合うことで、子どもたちの経験値となっている。新しい小中一貫校では、学区が1つになることで子どもの声が聞こえなくなるのではという声も聞こえているし、現在各連区で行っている活動を尊重しながら、相乗効果が発揮できるような活動が必要だと考えており、更には親世代の地域への積極的な関わりも必要だと考えている。瀬戸市内でも親世代の関わりに関して課題を克服している地域があるはずなので、その成功例から学び、各地域に合った活動をそれぞれ考えて活動していくことが、地域の新しい繋がりとなっていくのではと考えている。PTA、学校、自治会、企業、行政など様々な立場の役割を明確にし、必要な時には1つずつの輪を繋げていくと瀬戸市全体に大きな輪が広がると思う。

委員

教育委員として、昨年は光陵中学校と品野台小学校へ、今年には原山小学校、八幡小学校、下品野小学校へ訪問した。たまたまどこも外国人児童・生徒の割合の高い学校であった。子どもたち同士の様子を見ると、コミュニケーションは問題なく行われていると思うが、母語が日本語でないために、学習能力があるにもかかわらず授業についていけない子がいるのも事実である。原山学区では、万博以降、「こども日本語教室はらやま」が開催されている。開催にあたり、公民館の貸し出しは無料だが、運営は全くのボランティアであるため、基盤が安定せず、様々な面で難しいことも多いようだ。もちろん日本語初期指導教室など行政の取組があることは承知しているが、その中で時間は限られているため、それを補う形で地域がサポートできる体制があるといいと思う。品野地区はフィリピン人系の方が多いため英語でコミュニケーションできるが、品野でも原山のような取組ができるといいと思う。また、昨日たまたま、原山小学校で瀬戸ロータリークラブ主催のイベントがあり、親子で外国語での読み聞かせと、瀬戸焼そばを親子で作って食べもらう、ということが行われていた。自分の母親が自分の母語で読み聞かせをする、という点がとても素晴らしい、また瀬戸焼そばを通して親子が触れ合う様子も見られ、学校訪問では見ることのできない姿がとても印象的だった。こういった国際的な事業が更に広がっていくことを望んでいる。

委員

掛川小学校では、地域と共にある学校を目指し、地域の力を重要視しており、2015年から地域力向上委員会が市から委託を受け、放課後学級「掛川っ子広場」が開設され、「地域の子どもたちは地域で育てる」をモットーに活動し、現在は掛川小学校の児童全員が登録している。先日行われたお別れ会にお邪魔したところ、児童・保護者からも感謝の声が多く聞こえ、また子どもたちを見守る地域の方の優しいまなざしが印象的であった。地域力向上委員会の一部には子育て支援部があり、そこにはPTA、子ども会、学校サポーターが関わり、人間関係の深まりを通じ子どもたちの人格形成に大きく寄与している。今後担い手に関しては課題が残る印象であるが、4月からは放課後学級の運営に新しく4人が携わる予定で、そのうち1人は掛川小学校を卒業した保護者で、残りの3人はその方の声掛けで集まったようだ。帰り際に、学校サポーターとして関わっている母親から「わが子が育った学校に今も関われるのは嬉しい。校長先生交替時には自宅にまで来て挨拶をしていただき、自分もこの学校にまだ関わっていいんだと思った」と、大きなきっかけになったようだ。地域の方は掛川小学校の児童と掛川小学校を心から大切に思っており、生きがいにもなっている。児童の登下校時や学校行事には必ず学校サポーターの姿があり、学校を支えている。今後も順調に運営していけるよう、行政にも見守っていただきたい。

委員

今日は思いを2点述べさせていただく。1点目は、私も瀬戸をこよなく愛している人間であり、この町が魅力ある町であるためにどうしたらいいかと考えた時に、ホスピタリティを大切に、地域の取組の根幹にはそれがある町だと思った。瀬戸は陶器を中心とした豊かな資産を持っており、その持っている“モノ”に雰囲気を含めホスピタリティが上乘せされると魅力が広がるのでは。子どもたちがその心を持つためには地域を愛さないといけないし、郷土を大切に思う心を育むことが必要である。もう1点は、地域と学校との協働に関して、新しい小中一貫校の取組の周知はだいぶできていると思うが、学校を支える地域の広がりというか、5つの連区が1つになるにあたり、学校とタイアップする地域が一体感をもてる仕組み作りがカギになると考えている。地域と学校との協働という点で考えると、コミュニティスクールや地域学校協働本部があり、学校の運営の方向付けに地域の方々が主体的に関わり、また、地域学校協働本部でも地域側が主体的に学校を支援する方法を考えるというところがポイントである。今年度は長根地区をコミュニティスクール研究指定校とするので、それを踏まえて新しい小中一貫校や他の学校でのロールモデルとなっていくことと思う。跡地利用に関しても様々な検討がされているが、それぞれの地区の歴史と伝統を大切にしていけるものであって、かつ、地域の人が触れ合える場所であるといいと思う。

教育長

各委員から出た意見を細分化して実行しようとするやることが大変たくさんあるように見えるが、目標の共有で終わらないよう気をつけなければいけない。この1年かけて5つの学区のPTA、教員、地域の方が入ったワークショップを行った。4回目のワークショップの時に、その場にいた人たちが一体感を持ったように見えた。大切なのはいい提案があったとかそういうことではなくて、その先の一体感を持つに至るまでに話し合ったり、自分の気持ちを切り替えたり、自分が置かれた役割を理解する当事者意識を持ったことであり、その瞬間が本当の意味でのスタートである。なぜ小中一貫校をやるのかと問われた時に、小中一貫校を作ることや小中一貫教育をすることだけが大切なのではなく、そういったことを課題として全員で練り上げる過程が大切なのだと改めて認識した。長根小学校で行われるコミュニティスクールに関しても、新しい枠組で何か始めるわけではなくて、今まで地域力でやっていたことを学校という繋がりの中で紹介し、その取組を知ることで賑わいが生まれ、また、今やっていることを支え合うことで充実感が持ち共有できる、という点を大切にしたいと思っている。そのためには、学校と地域を繋ぐコーディネーターである地域コーディネーターが基本の考えを共有することが重要となってくる。最後に1点、瀬戸市がいま全国に先駆けて行おうとしている大きなプロジェクトは、新しい小中一貫校ができることは形の部分で、瀬戸市全体の人が年齢層関係なく子どもたちを育て、自分たちも育つということに向かっていこうとしており、その目標を共有してやっていくこ

とが大切である。

市長

教育委員の皆さんが、学校という教育現場をととても大切に思っていることが伝わってきた。放課後学級や地域の方との触れ合い、親子関係など、こんな素晴らしい活動をしている方々がいることを広報などで瀬戸市全域に長期的に紹介し、共有していけたらいいと感じた。素晴らしいことは市民全体で共有し、「それなら私たちもやってみよう」という気持ちを持つ市民が増えていけばいいと思う。また、小学校区を改めて見直した時に、今回5地区が1つになるということは、個別のアイデンティティを大切にしながら次元の違うところで一体感を持とうとするという点は、本市の文化にもかかわる大きな問題である。それに対して全く違う切り口から1つ考えてみると、現在本市の歴史文化基本構想をベースに、市内の観光拠点を作ろうという事業が行われており、各地域で昔からある伝統的な祭はもとより、有形無形の文化財を活用して観光資源としてみたときにどういうことが紹介できるかというプレゼンが先に行われた。その中には掛川があり、水野もあり、それをよく考えると小学校区の中で「我が地域の誇れること」でストーリーを作って、子どもから大人まで別々の役割を持ち、運動会や盆踊りなど、学校が関連した行事が、その地域の歴史や伝統を踏まえた形で地域を盛り上げていこうというアプローチがあってもいいのかなと感じた。教育長が言うとおりに、何かの形を作ってその通りやりましょう、という時代でもなく、本質的なところで、現在の様々な事業が教育や地域の絆に繋がり、災害が起きた時の共助の精神に繋がり、それが目指すところのホスピタリティになるとすれば、それは結果的にそうなるのであって、目標にするのは難しいかもしれないが、今日は瀬戸市のいいところがたくさんあるということへの理解が深まった。これからも今日のような意見交換の場が持てればいいと思う。何かほかにご意見はありますか。

委員

瀬戸市にはいいところがたくさんあるので、それをもう少しうまく紹介していくことや、とりわけ今は名古屋のオアシス21が海外でとても有名なスポットとなっており、海外からも含めて人を呼び込むことを考えていきたい。個人的には、美大生がもっと瀬戸に増えるといいなと思っている。また、セントレアを降りたら常滑から瀬戸を通るルートが観光ルートとなるといいと思う。